

長野県における自然資源を活用した 就学前の保育・幼児教育の実践事例に関する報告

A Report on Cases of Early Childhood Education and Care Utilizing Natural Resources in Nagano

多田 幸子

TADA Yukiko

酒井 真由子

SAKAI Mayuko

信州型自然保育の特化型に認定された長野県内の二つの就学前施設が展開する、野外での自然体験を重視した保育実践を視察した。各施設では日常的な保育を参観し、常勤職員の保育理念等に関する談話を聞き取った。参観内容と職員の談話を整理し、まとめたところ、両施設に共通する、自然地で保育を実施するために求められる配慮事項や、学齢期より先を見据えた長期的な発達支援の視点が認められた。

キーワード：就学前児 野外での保育 地域の自然資源の活用

はじめに

自然資源とかかわる経験は、子どもにおける心身の発達に総合的に寄与することが期待されている。幼稚園教育要領や保育所保育指針では、従来にもまして幼い子どもが周囲の自然資源と相互作用する機会を保障し、野外での活動や遊びを充実させていくことの重要性が示唆されるなどしている。そのような中で、自然地を構成するさまざまな要素を取り込んだ活動や遊びを中心に据えた、就学前児への養護と教育の一形態である自然保育に注目が集まっている。

自然保育は、信州型自然保育認定制度実施要綱では、豊かな自然環境や地域資源を積極的に活用した様々な体験活動によって、子どもの感覚が豊かに刺激され、子どもの主体性、創造性、社会性、協調性等が生まれ、心身ともに健康的に成長することが目指すものとされる^{註1}。この保育の中では活動や遊びの場となるフィールドの多様性や可塑性のため（前田・小笠原・加藤、

2020)、子どもそれぞれの興味・関心により柔軟に応じられる可能性が指摘されてきた(長野県、2015)。日本では、デンマークやドイツなどの欧州諸国の例を参考に認可外の保育として普及し、近年は公的な認定あるいは認証制度が導入されるようになり、その認定園や認証園の数もにわか増加している(茶屋、2017)。

では、心と体の成長・発達を効果的に促す一つの手立てとされる自然保育の実践園では、いかにして、子どもたちが心身ともに満たされ豊かに生きていくことを支える環境や経験(OECD、2015)を整備しているのだろうか。子どもや保育者を取り巻く自然資源の何に焦点を当て、自分たちの活動や遊びに組み込んでいるのか。また、地域の自然資源を活かした体験活動を重視する保育の具体的な内容を構成し、再構成する際の配慮の視点はどこに据えられているのか。

以上のような問いに基づき、自然保育を実施している就学前施設の日常保育を現地に赴いて参観するとともに、保育理念等に関する常勤職員の談話を聞き取ることにした。訪問先となったのは、長野県で2015(平成27)年に創設された信州型自然保育認定制度において特化型にあたる(長野県、2021)、「一日の保育時間のうち大半を屋外で過ごすことで、たっぷりと自然体験」ができる2つの就学前施設であった(長野県、2015)。施設訪問は、野外での活動や遊びが子どもにも保育者にも身体的な負担なく行いやすく、園行事などの支障にならない秋季の9月、11月に実施した。

NPO法人 山の遊び舎はらぺこ

1 視察実施日の情報

実施年月日は2021年9月14日、視察先の本拠地がある伊那市の気象記録については、天気は曇りのち雨、日最高気温21.3℃(14:40)、日最低気温16.4℃(04:50)、日積算降水量2.0mm、日最大風速m/s 2.3(18:50)、日積算日照時間0.0時であった^{注2}。

2 施設の概要

NPO法人山の遊び舎はらぺこ(以下、はらぺこ)の概要を、施設が運営するインターネットサイトより^{注3}、以下にまとめた。

はらぺこは、2005年4月に、「自然の中でのびのびと子どもたちを育みたい」と考える「母親たち」をきっかけに、「保育士、保護者」、またその保育理念に賛同する「地域」の周辺住民も「一体となって」、長野県伊那市に創設された就学前児対象の保育施設である。創設当初から、自然地での活動や遊び、栽培・飼育の体験を通して、感性、認知、社会性等の発達に必要な「生活」経験ができる「空間」づくりや「集団」形成が叶う保育環境の整備に努めてきた。また、ともに「学びあう」「仲間」として「保護者」を日常保育の場に迎え、子どもの実態に合った保育指導のあり方を検討し続けている。

3 園舎周囲の環境

本拠地となる園舎は長野県伊那谷北部に位置する伊那市にある。園舎裏手には窯や炉、その燃料を収めた小屋が設置された庭に加えて、平らな草地と畑、それらの奥に落葉広葉樹の森が広がっている。敷地内の各場所は、その日の活動や遊びの内容に応じて選択され用いられる。また、敷地外の、園舎から半径約1 km圏内に、一級河川の天竜川とその支川が流れている。

4 参観時の保育の流れ

登園した子どもたちは、服装などの準備を整えて、保育者とともに園舎裏の炉を囲みながら朝会を行い、健康観察の後に一日の流れ、活動・遊び時の留意点の確認を行った。朝会後は、天竜川に向けて、子ども・保育者・保護者がそれぞれに必要な物品を持ち、徒歩で移動した（Figure 1）。目的地である河原に到着後は、移動可能範囲と遠方に移動する際の条件、この日は奨励されない行動等について確認し、途中で昼食をはさみながら、河原での自由遊びをした。

保育者は、子どもの遊びの広がりや天候の変化を踏まえて、上流から下流に遊び場を移すよう促し、また、帰路の徒歩移動に備えて子どもの持ち物や服装を整えるなどした。河原からの帰路では、子どもが興味を示した自然河川に近い農業用水路で水生生物を探したり、街区公園に立ち寄り休息と栄養補給、また園舎にはない遊具遊びをしたりした。園舎到着後は、子ども・保育者・保護者それぞれに必要な着替えを済ませ、屋内で、ギター演奏を伴うふれあい遊び、絵本の読み語り、一日の振り返りを行った。



Figure 1 天竜川の河原まで草をかき分けて進む子どもと保育者

5 保育の理念、保育の方針

有資格者として日常保育に携わる小林成親氏による、はらぺこでの保育の理念、保育の方針に関わる談話と談話から示唆されたことを以下にまとめた。

1) 子どもとのかかわりにおいて重視すること はらぺこでは、年間を通した保育の中で、認知的側面だけでなく、情緒や社会性の側面でも「育ち」という変化のいちじるしい幼児期にある子どもが「味わって」ほしい「幸福感」を感じられる環境を作れているかどうか注目する。この「幸福感」を構成する主要要素のひとつとして、「その子とその年齢、そのときにやりたいこと」に打ち込めたときに得られる「充実」感を挙げ、この「充実」感を、自然地などの野外での活動や遊びを中心とする保育においても「味わえ」るこ

とが肝要とする。保育者による常日頃の参与観察は、充実した活動や遊びのきっかけとなる子どもの興味・関心の「サイン」を「敏感」に察知するために意味を持つ。

保育者は、「その時々・状況に応じた子どもの心身が求める」活動や遊びができるように、施設の屋内外の環境を整えている。子どもの現状をふまえて保育のねらいや目的を立て、そのうえで活動や遊びの内容、またそれらを行う場所、その場所までの移動方法も選択する。そのため、特定の場所に子どもたちと出かける際も、その日の活動・遊びで目指される体験によっては、前回に訪れたときとは異なる移動手段、移動経路がとられる。

2) 園舎がある地域の環境のとらえ方 はらぺこでは、日常的な野外での活動や遊びにあたり、敷地外の自然地にも頻繁に赴く。移動した先の自然地での活動や遊び時には、保育者・保護者は、子ども自身が楽しさを見出せるように準備をする。例えば、周囲の探索をする際の服装や持ち物、一緒に活動したり遊んだりする仲間への振る舞い方などは、活動始めまたは遊び始めに明確かつ端的に指示を出す。加えて、特に、ケガにつながる事故発生の可能性が予想される場所では、「いざとなればおとなが入る」ことができる配置で、複数の保育者が、身動きしやすい服装及び姿勢で見守る。

さらに、自然地を選択する時点で、その場を構成する自然物に関する知識を備えた者が助言等を行っている。例えば、川などは、水質が良好であれば水温が比較的低く、結果的に水生生物を見つけにくい。そのために、保育のねらいによっては、汚染のない自然地が活動・遊びの場所として適さないこともある。よって、保育者は、ねらいと、ねらいを達成できるような地域の自然資源に関する知識、生態学的な知識を、実際に現地に赴き、活動したり遊んだりすることで獲得しておくことが求められる。

3) 子どもの発達に寄与するために保育者に求められるもの はらぺこでは、遊びを、遊ぶ主体である子どもが楽しいと感じ、また充実を得るものと定義し、何かを獲得する手段としての側面よりも、それそのものが動機として機能することに、つまり目的としての側面に注目する。さらに、遊びを、「固定的」で静的な現象とはみなさず、また個人が有する心身の状態だけを反映するものとも考えない。ある場面で子どもが見せる遊びは、その子どもが「今」、「ここ」における「環境」を構成する要素からも「強い影響」を受けるものと捉える。まとめると、遊びは、遊び手が置かれたそのとき・その場における物理的状況や社会的状況によって変化しうるものであり、発達の指標以上の意味を持つものと解釈される。

こういった遊びに対する理解を背景にしながら、はらぺこでは、活動や遊びの場が施設内か施設外かに関わらず、保育者が子どもの遊び場面を頻繁にまた集中的に観察し、またそこに同等の遊び手として参与することを通して、特に幼児期の遊びの持つ意味について繰り返し考え、意見交換している。このような保育内容の計画に関わる日常的な取り組

みを経て、保育に携わる側は子どもの遊びに変化をもたらす物理的条件に気付くことがあり、その気づきが次の活動や遊び場面での新しい試みにつながる。

例えば、自然地の中でも「空が高い」などの、上方に向けての物理的広がりや明確に知覚される活動場所・遊び場所では（Figure 2）、他の場所に比べて、子どもは「気持ち」が開放的になり、興味・関心の対象を広げやすく、また、粗大な運動を伴うような遊びが起りやすいことに、保育者が気づいたとする。そのような気づきは、他の保育者と共有され、翌日以降の、全身を使つての移動や運動を伴う探索活動を楽しめるような計画づくりに活かされ、場所選択の際に、頭上を遮るものがない状態で雲の動きなどを目視できるポイントがあるかという新しい観点が導入されることにつながっていく。



Figure 2 天竜川の河原から見える風景

また、活動や遊びへの継続的な参与観察は、子どもの活動や遊びの展開を左右する要因についての洞察も生む。特に、はらぺこのような散策型の自然保育を実施している園の保育者は子どもとともにさまざまな場所に赴くため、その場所において玩具・遊具となる自然物の量や種類と、活動・遊びそのものの深まりや広がりとの間にある関係について考えるきっかけを得やすい。これは、玩具や遊具となるものが多種多量にあるからといって、必ずしも子どもの遊びが複雑になったり、他児を巻き込む形で盛り上がりたりするわけではないことへの気づきをもたらすなどする。玩具となりうる自然物やそれらを作り出すための道具の種類が限られている場所では、むしろ、特定の活動や遊びが途切れずに続き、その過程で自然物を多様な方法で操作する様子が見られるようになる。

先述したような地域の身近な自然地などでは、3歳代の年少の子ども、また、特別なニーズがある子どもも活動や遊びに加わることがある。そのような場合、保育者は、仲間と活動や遊びの場をともにすること自体に、一人ひとりの子どもの育ちを促す効果があると考え、その発達差を踏まえながら、各児がそれぞれの興味・関心に基づいて自分なりのペースで周囲を探索することを安全に楽しめるように援助する。

子どもたちに発達差があるからこそ、自然地での活動や遊びの決まり事等を伝達するときは配慮が必要となるが、例えば、特別なニーズがある子どもにも分かりやすい伝え方ができれば、年少の子どもにとっても理解しやすく、結果として、その場にいるすべての子どもにとって理解しやすい教示が可能になる。このとき、活動・遊びに関わるルールやマナーの確認に代表されるような子どもにとって「やらねばならないこと」に取り組む時

間はできるだけ短く、それらのルールやマナーを守って「やりたいこと」に打ち込む時間をできるだけ長く保てるよう、用いることばや呈示のタイミング等を吟味する。

加えて、異年齢の子どもたち、また発達上の特徴がある子どもたちが、場を共有して活動したり遊んだりすることを繰り返す中で、各児は周囲の仲間の存在を意識するようになり、仲間からの肯定的な影響を受けるようになる。これは、例えば、ある子どもが一人では挑戦しないことを、周囲に仲間がいることによって、その「仲間集団」の「勢いに押されて、やってみよう」と思ったり、その結果として達成したりすることを指す。はらぺこでは、自然地での活動や遊びの計画を立てるにあたっては、こういった、他者の存在が成長・発達のかっかけになるような経験を子どもが積み重ねていくこともねらいに含める。

4) 卒園後の子どもの姿に関わる取り組み、考え方 程度の差はあれ、自然物が主たる構成要素となる環境では、子どもが「楽しさや面白さを自分から」見いだしてそれを追求しなければ遊ぶことがかなわない。しかしながら、自然物には砂や水、植物に代表されるように「人の手」による「変化」を受容するものも多いため (Figure 3)、どう働きかけたらよいかかわれば、人工的な玩具や遊具とは異なる楽しさや面白さを追求・産出することが十分に行える。こういった、屋外での自然資源と関わる活動や遊びを、園での「暮らし・生活」の中で頻繁に経験することを通して、子どもは日常生活の中で「面白いこと」「楽しいこと」を見つけていく習慣がつく。この習慣は、子どもたちが将来、学齢期以降にどんな環境下に置かれても、自らで興味・関心を追求することを下支えするものになる。



Figure 3 川辺で水と砂に触れている子どもの手元

一般社団法人ちいろばシューレ 認定子ども園ちいろばの杜

1 視察実施日の情報

実施年月日は2021年11月1日、視察先の本拠地がある佐久穂町に隣接する佐久市の気象記録は、天気は曇りのち雨、日最高気温19.4℃(13:50)、日最低気温2.7℃(05:50)、日積算降水量0.0mm、日最大風速m/s 2.1(14:30)、日積算日照時間5.3時であった^{注4}。

2 施設の概要

一般社団法人ちいろばシューレ認定子ども園ちいろばの杜 (以下、ちいろば) の概要を、施設が運営するインターネットサイトより^{注5}、以下にまとめた。

ちいろばは、本拠地がある「旧八千穂村（現佐久穂町）の大石地区」の子育て世代のニーズに基づき、「自然に囲まれた地域」の中での「生活」を通して「みんなで創り、みんなで育ち合」う就学前児対象の保育施設である。子どもが「地域と関わり、自然と関わり、その場にいる一人ひとりと関わり合いながら、自分なりの価値観や考えを持」てるようになることを目指し、「生活に根ざしたもののの中からヒントを得」た保育を重視している。また、地域に「多様な価値観を持つ人々が集って」、緩やかに「関わり補い合」えるコミュニティが生まれるような地域の社会資源との連携のしかたを模索している。

3 園舎周囲の環境

本拠地となる園舎は長野県南佐久郡に位置する佐久穂町にある。園舎周囲に遊具などの設置された園庭、畑に加えて、自動車で数分の山中に、周囲の自然資源を用いた活動や遊びのための常設の広場を有する。この広場は平常時には毎日用いられ、悪天候でなければ朝会、昼の食事、暮会等のプログラムも実施される。活動・遊び時には、山の斜面下を流れる大石川の支川から水声が届く。

4 参観時の保育の流れ

登園した子どもが揃い次第、服装等の準備を整え、園舎から山に設けた広場へ乗車と徒歩で移動し（Figure 4）、広場に常設の煮炊き用の炉を囲みながら朝会を行った。保育者のギター伴奏での歌唱、一日の予定確認、移動可能範囲や奨励されない行動等についての注意事項の確認がなされた後、昼食まで活動・遊びの時間となった。

広場は山土の平地に加えて、岩場、水・泥溜り場、また草地などから構成され、周囲に広葉樹が育っているほか、手洗い場、木工、火熾し、ふり遊び・見立て遊びのためのコーナーが設けられていた。昼食で、園舎から広場まで運ばれる弁当給食をとった後は、暮会まで、午前中の活動・あそびの続きが行われた。

保育者は、特に専門的な知識や技術を要する活動のコーナーで作業の援助を行うだけでなく、各コーナーを巡ったり、広範囲の散策に同行したりして、各児の活動・遊びの様子を見守った。暮会時には朝会と同様に、子どもとともに広場の炉を囲んで着席し、ギター伴奏での歌唱、一日の活動・遊びの振り返りと成果の共有等を行い、その後、園舎に戻って着替え等を済ませ、子どもの降園に備えた。



Figure 4 山中の広場に向けて歩く子どもと保育者

5 保育の理念、保育の方針

施設長である内保亘氏、常勤保育士である粕渕佑輝氏による、ちいろばでの保育の理念、保育の方針に関わる談話と談話から示唆されたことを以下にまとめた。

1) 子どもとのかかわりにおいて重視すること ちいろばでは、人や人の暮らしを、他者との関係性の中に位置づき、他者との「つながり」から「切り離せない」事象ととらえ、そういった人の暮らしに立脚した「保育という営み」も同様に、他者との「つながり」を意識して行われていくべきと考える。子どもへのかかわりの根底には、保育はそのとき、その場で、子どもと保育者、保護者が協力して創発的につくり上げていくものとする考え方がある。「子どもありき」「その子の今の状態ありき」で保育を計画・実施・振り返りを行うことを常に心がけ、そのため、しばしば子どもとのかかわりは「手探り」になる。「手探り」でのかかわりは、子ども理解のアプローチと関連しており、ちいろばでは、まず「その子にかかわって」みて、「やりとり」を重ね、その中で理解の「糸口」を探し、「糸口」が見えたら次の「かかわり」を考え、実行するよう努める。こういった「子どものことが分かって」くる過程を、「早く相手を理解したい」、理解しないと「援助が成り立たない」と思い、「焦りながら」保育した経験をもつ保育者の思いをくみつつも、「理解してから」始める支援の過程以上に重視している。

また、子どもの姿、特に保育者や保護者といったおとなが目にしていく子どもの姿はそのとき・その場で現象的に変わりうるものととらえる。各年齢段階の平均的な子ども像を目の前の子どもの当てはめるだけでなく、その状況下に居合わせたおとなとの関係の中で、その子に必要なかかわりを考えていくことを重要とする。

2) 園舎がある地域の環境のとらえ方 南佐久郡佐久穂町は寒暖差が大きく、特に、ちいろばの園舎や広場のある山中は気温差のみに基づくと、必ずしも「暮らしやすいとはいえない」。しかしながら、このような地域の「暮らしに根ざした保育」の場では、子どもは季節の変遷を樹木等の様子から容易に把握でき、周囲の自然物の変化から「こういうことをしてみたい」という意欲や関心を掻き立てられることも多い。

ちいろばは、先にも上げた通り、近隣の山に、園庭とは別に日常利用できる野外の広場を持ち、その広場で自然資源にかかわる活動や遊びを行っている (Figure 5)。こういった特定の活動・遊びのための場所が



Figure 5 泥水溜り(手前)と木製ブランコに乗る子ども(奥)

ある園には、日々の計画にもとづきつつ地域のさまざまな自然地に赴く散策型の自然保育を行う園と異なる、保育の難しさと面白さがある。

例えば、毎日同じ場所での活動となるため、子ども以上に保育者が、その場所にある自然物が呈する「変化」への感受性を磨いておくことが求められる。だが、この「変化」に気づく力が、子どもの発見を活動や遊びにつなげたり、今取り組んでいることの「楽しさ」を深めたりすることになる。また、こういった、子どもの活動や遊びの展開を援助する視点を持てることで、保育者は、一層、子どもとかかわりやすくなる。

3) 子どもの発達に寄与するために保育者に求められるもの ちいろばでは、粕淵氏のように担任として日頃から継続的にかかわりが可能な保育者と、内保氏のように特定の曜日限定で断続的にかかわる保育者が、協同して子どもの活動や遊びを支援している。限られた曜日でのみ子どもと活動や遊びと共にする保育者は「めずらしいひと」であるからこそ、「提案」したことが子どもの興味を掻き立て、関心を引きよせることができる。そして、担任のように、日常的に子どもと過ごせる保育者は、常に「いっしょにいられるひと」であるからこそ、子どもが興味・関心を示した提案を遊びや活動の中でどうしたら「実現」できるかを「具体的」に考え、試みてみるができる（Figure 6）。

このとき、自然資源を活用するために、「特定の領域」の詳しい知識や技能、過去の経験があると試行の選択肢が広がる。例えば、子どもが、調理や食事に興味を持ったとき、園での栽培活動から菌類に注目し、その中でも酵母を育ててみる事が考えられる。このような場合、パン作りの経験、また、天然酵母を利用した調理の経験がある保育者がいることで、子どもとともに、地域で生産される果物等と水分で酵母を培養し、その酵母を用いてパン生地を発酵させ、広場の炉で焼き上げることに挑戦できるかもしれない。「特定の領域に強い」ことは、自分たちの「身の回り」の「世界」を構成する肉眼ではとらえられない酵母のような小さな要素への気づきともいうべく「見えないものを見る」力を持つことといえる。

さらに、ちいろばでは、保育者は、単なる保育士という資格を持つ者としてではなく、どのような個性を持ったひとりの人間として子どもと「共に生活」し、彼らの学びや遊びに「向き合おう」と思うかを自問自答し続ける必要がある者と捉える。「わたしという一人の個人」を「模索し続ける」ことは、対人援助職に求められる自己に対する覚知を深める努力を促すことに



Figure 6 木エコーナでナイフを使って枝を削る子どもの手元

つながり、子どもが求める「伴走」者になることを助ける。

また、保育者には、子どもの活動や遊びの計画を立てたり、準備をしたりしていくときに、特に、生活場面に残されている中身を伴わなくなった「型」を見直そうと努めることも重要と考える。社会生活を営んでいるおとなの立場から保育の現場を改めて見つめたとき、「現実的ではない」と感じたり、「違和感」を覚えたりすることはさまざまある。例えば、昼食時に、子どもたちが全員、同じ場所に集い、決められた席で一斉に食べ始め、定められた量を食べきり、食べきったことを保育者に確認してもらいに来る、といった流れが該当する。実生活の中では、食事を共にする相手や、場所、量などは、食べる人の心身の状態や、食事前後の活動との関係で調整され、変わりうるはずのものである。「生活者」として「成長」し、「社会」に出ていく存在として子どもをとらえたとき、こういった「不自然な」物事の進め方に気づき、より実生活に活かせる体験を生むような場面に作り替えていけることも保育者には課されている。

4) 卒園後の子どもの姿に関わる取り組み、考え方 ちいろばでは、これまでの保育実績や社会の現状から、卒園児に対しても、豊かな自然体験を重ねていけるような継続的支援の必要性を感じている。その背景には、今日の子どもは卒園し「進学」と同時に、自然地での遊びや活動の機会を失い、安心して自分のペースで活動したり遊んだりできる「居場所」といえるところが「自宅」「学校」に限定されるようになってきている現状がある。このことは、自然豊かな野外での活動や遊びが就学を境に、ほとんどできなくなってしまったことを意味する。

自然資源をめぐる学びを乳幼児期で終わらせないために、ちいろばでは例えば、小学生になった子どもが1・2年次に、新しい環境にまだなじめず「疲れた」とき、在園児に交じって山の広場での活動や遊びに再度参加することを容認している。この場合、施設は、子どもが自然地での活動や遊びを通して自らの力で「回復」し次の「ステージ」に「移ろう」と思えるまでの「居場所」として機能し、学びの移行支援の場となっている。なお、このような、多くの子どもたちに「開かれ」た体制を整えていくことは、最終的には、地域の異世代がよりどころにできるような、ちいろばが目指す「心の故郷」をつくることにつながる。

総合考察

本稿では、信州型自然保育認定制度で特化型に分類される二つの就学前施設への視察結果をまとめ、報告した。視察を通じて、それぞれの施設が実践する野外保育は、子どもにとって「自然についての学び」と「自然を通じた学び」という異なる種類の学びの可能性をはらむことが窺いが知れた (Ånggård, 2014/2019)。これはつまり、子どもは、泥・土、水、植物等を玩具

的に扱いながら、それらが持つ性質や自然物間の循環、さらには、自然物の中に身を置いた状態での食事のとり方や暖の取り方について理解する機会があるということである。そして、こういった活動や遊びの体験文脈を他児と共にし、散策やイメージを共有する遊びを互いに楽しもうとするとき、その過程では人間関係の調整や表現の方法を徐々に身に着ける機会も期待できることを指す。

ただし、このような学びの機会を宿す体験は、自然地に子どもとともに訪れさえすれば、自動的に発生するわけではないようであった。すなわち、保育者が、子どもや子どもを取り巻く環境の多様な要素に対する意識的かつ細やかに注意を払い、自然地が子どもにとっての活動及び遊びの場所となるように整えていこうとしてはじめて実現するということである。例えば、自然地での活動・遊びに際しては、保育者は子どもに移動可能範囲に関わるルールやその場所での振る舞いに関するルールを、簡潔かつ明確に、折に触れて繰り返し伝えていた。打見にはもどかしく思われる一場面でも、この丁寧な伝達があることによって、子どもは、「観察可能」な「境界」がないために「位置や外観」から「明確に特定」しがたい活動場所・遊び場所も把握しやすくなる（Ånggård, 2014/2019）。そして、心身ともに安全に、自然地で自分の活動や遊びに没頭できるようになるといえる。

なお、上に挙げたような情報伝達にあたり、保育者は、必ずしも自然科学的事象の「専門家である必要はない」かもしれないが、その「地域に精通している」必要はあるようであった（Rosengren, 2018/2020）。深く理解するために、両施設の保育者は実際、以前に訪れた場所であっても、保育前に改めて足を運び、自らも自然物や自然物に関わる人材とも直接的に相互作用していた。この保育者自身の直接体験の積み重ねが、地域の自然資源に関わる体系化された知識を構築することを支えているように推察される。そして、子どもたち一人ひとりにわかりやすい簡潔かつ明瞭な、教示をはじめとする情報伝達に、さらには、自然地での保育に対する保護者や地域住民からの理解と協力を得ることにも、つながっていると考えられる。

最後に、本視察を通して、自然保育実施施設が日常的な自然体験に内包された可能性に対して寄せる期待を改めて実感した。可変性に富む自然資源を活かす活動・遊びの中で、楽しさや面白さを存分に追求するには、活動する主体・遊ぶ主体の側に自発性や自律性、他者性が求められる。保育者は、これらの、野外で自然物と密にかかわる保育の中で無理なく養われうる性質が、学齢期を越えた先の将来に子どもの実生活を支えるものとなることを予期しているようであった。そして、この予見のもと、子どもが、今以上に複雑化しているであろう社会においても、「多様」性や「変化」を「主体的に」受け止める力の基礎を培えるように、また「自ら問いを立て」、「他者と協働」的にその「解決を目指」す初期経験に恵まれるように（文部科学省, 2015）、大小さまざまな努力を伴いながら日々の保育に臨んでいることが察せられた。

謝辞

この度の視察受け入れをご快諾くださった、小林成親先生、内保亘先生、粕渕佑輝先生、ほか両施設に関わる全ての方に心よりお礼申し上げます。

注

- ¹ 長野県の運営するインターネットサイトの「信州型自然保育認定制度実施要綱」のページを参照。
<https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomokatei/kyoiku/kodomo/shisaku/documents/youkou.pdf> 最終閲覧2022年1月6日.
- ² 日本気象協会の運営するインターネットサイトの「伊那(イナ)のアメダス:過去の天気2021年09月14日」のページを参照。
<https://tenki.jp/amp/past/2021/09/14/amedas/3/23/48621.html> 最終閲覧2022年1月6日.
- ³ 山の遊び舎はらぺこの運営するインターネットサイトの「はらぺことは」のページを参照。
<https://harapeco.org/h/harapeko> 最終閲覧2022年1月6日.
- ⁴ 日本気象協会の運営するインターネットサイトの「佐久(サク)のアメダス:過去の天気2021年09月14日」のページを参照。
<https://tenki.jp/amp/past/2021/11/01/amedas/3/23/48386.html> 最終閲覧2022年1月6日.
- ⁵ 認定子ども園ちいろばの杜の運営するインターネットサイトの「ちいろばって?」のページを参照。 <https://chiirabayachiho.wixsite.com/home/blank-7> 最終閲覧2022年1月6日.

引用文献

- Ånggård, E. 2019. 高見幸子・光橋翠(訳). スウェーデンにおける野外保育のすべて:「森のムッレ教室」を取り入れた保育実践. 東京:新評論.
- (Ånggård, E. 2014. *Ett år I och skur: utomhuspedagogik i förskolan*. Lund: Studentlitteratur.)
- 茶屋智之. 2017. 自然環境と幼児理解の視座:自然保育ポータルサイトの実践例の分析から 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要, 第4号, 21-32.
- 前田泰弘・小笠原明子・加藤孝士. 2020. 野外保育が幼児の発達に与える効果に関する研究の展望と課題:移動運動と姿勢制御の発達に与える効果を中心に. 長野県立大子ども学研究, 第2巻, 39-50.

文部科学省. 2015. 「1. 2030年の社会と子供たちの未来」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364310.htm 最終閲覧2022年1月6日.

長野県. 2015. *信州型自然保育ガイド*. 長野：長野県県民文化部次世代サポート課.

長野県. 2021. *信州型自然保育認定園一覧(令和3年10月現在)計240園*.

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomo-katei/kyoiku/kodomo/shisaku/documents/ninteidantai-ichiran.pdf> 最終閲覧2022年1月6日.

OECD. 2015. *Starting Strong IV: Monitoring quality in early childhood education and care*. Paris: OECD Publishing.

Rosengren, R. 2020. ヴィンスルー美智子・村上進(訳). *北欧の森のようちえん自然が子どもを育む:デンマーク・シュタイナー幼稚園の実践*. 埼玉：イザラ書房.

(Rosengren, R. 2018. *Child of nature: Benefits of nature in childhood*. DK: Forlaget Blue Pearl)

付記

本報告は、堤裕美（上田女子短期大学）を代表とする令和3年度緑と水の森林ファンド公募事業「養成校と地域が連携した自然保育の人材育成・確保に向けた実証的研究～農山村地域における幼児期からの森林環境教育の推進に向けて～」の一環として行われた先進地視察をもとに作成された。